

# 2017 年度「国際哲学特講」

## アルザス研修（報告）

安孫子信

1. あらまし……………2 頁
2. 研修の詳しいスケジュール表……………3 頁
3. 参加学生の言葉から……………5 頁
5. 写真でたどる 2018. 2 アルザス研修……………10 頁



## あらまし

### ■はじめに

法政大学哲学科の選択必修科目「哲学特講」の一つ「国際哲学特講」（秋学期 2 単位）では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力の下で、学期の最後、2月初めに、ドイツのハイデルベルグ大学とフランスのストラスブール大学で、それぞれの大学の学生と、合同ゼミを実施しています。

この合同ゼミは、2つの大学でもそれぞれ半期の正規授業の最後の行事として、必須のものと位置づけられています。2017年8月に、2月に行うゼミのテーマを共同で選定することから始め、9月から2018年1月まで、それぞれの大学で準備のための授業を展開しました。その間、本年度に新たなこととして、10月から1月まで、ひと月に一度、計4回、ストラスブール大学との間では、スカイプを通しての事前の合同授業も実施しました。

このような準備を経て、海外研修期間中（2018年2月4日～2月11日）に、まずはハイデルベルク大学で、ついでストラスブール大学で、主としてCEEJAに宿泊しつつ、合同ゼミを実施しました。

### ■合同ゼミの内容

〈ハイデルベルク大学〉

今回の研修では、2月5日にハイデルベルク大学で、ハンス・クレーマ先生ならびにクレーマ・ゼミの皆さんと、「動物と社会」をテーマに合同ゼミを行いました。

青木人志『動物の比較法文化—動物保護法の日欧比較』を共通テキストに、法政側の発表をもとに、日欧（日独）両社会で、ペット犬の扱われ方や、食文化への動物保護思想の浸透のし方がどう異なるのかをまず確認しました。その上で、グループ討議そして全体討議を行って、その違いは、文化の違いとして相互に認め合い尊重し合うべきものか、それとも、比較考量され、両者間に優劣が論じられるようなものかについて、活発に議論しました。

〈ストラスブール大学〉

2月7日にはストラスブール大学で、昼食をはさみ丸一日、黒田昭信先生ならびに黒田ゼミの皆さんと、レヴィ=ストロース著『月の裏側—日本文化への視角』から、「神話」と「労働」と「自然」という3つのテーマを順に取り上げ、日仏両側から計6つの発表、その後にグループ討議、全体討議を行って、議論を深めました。それぞれ、スカイプで行った準備段階での議論も踏まえてのもので、過年度に比べても、さらに充実したものとなりました。

「神話」をめぐっては、日本人が神話と親和的であるというのは、日本人の後進性を表しているのではないかということ、「労働」をめぐっては、日本人が労働を必ずしも苦役とはしないとして、過労死といった事態がかくも容易に招来されるのはなぜかということ、「自然」をめぐっては、日本人が自然を愛好しながら、原発事故のようなあまりの自然破壊を生じさせてきたのはなぜかということ、など、レヴィ=ストロースの日本人観があまりに楽観的に過ぎるのではないかという点を、次々に論じて行きました。

翌2月8日には、ストラスブール大学で、同大学のアントナン・ベシュレル先生が特別に行って下さ

った講演「大江健三郎『セブンティーン』二部作における「アルカイックなノスタルジー」をめぐって」を聴講しました。講演に引き続いた代表質問には法政の5人の学生が立って（一名代読）、ベシユレル先生に鋭い問題提起を行っていました。最後2月9日には、CEEJAで、ストラスブール大学講師のデルフィーネ・ムラール先生が「奈良絵本・絵巻の制作—『文正草紙』を中心として」と題したレクチャーを、法大生のために行ってくださいました。

#### ■見学、観光とガストロノミー

以上はかなり密な研修の合間を縫って、ハイデルベルク旧市街（学生牢、ハイデルベルク城、ネッカー川など）、セレスタ旧跡（サン・ジョルジュ教会など）、オーケニスブール城、エギスハイムやリクヴィルといったアルザスの美しい村々、ストラスブール旧市街（プチット・フランス、大聖堂など）、コルマール旧市街（ウンターリンデン美術館など）を見学しました。また、食文化で知られるアルザス地方の代表的な郷土料理（シュークルト、タルトフランベなど）や名産のワイン（リスリング、グビュルトラミネールなど）も堪能しました。

#### ■授業以外での学生間の交流

2月5日のゼミの後、ハイデルベルグでは、ゼミを一緒に行ったハイデルベルク大学生たちと学食で昼食をともにしました。またストラスブールでは、一日ゼミの日であった2月7日、ストラスブール大学生たちと昼食や夕食をともにしたのはもちろん、その夜はともに、CEEJA近くのミッテルヴィルのホテルに宿泊し、飲み会も含む楽しい交流の時間を持ちました。またその翌日2月8日のストラスブール旧市街のグループでの見学には、ストラスブール大学生たちも何人かが同道してくれました。ゼミでの議論を通じてのものとはまた別の、このような打ち解けた交流も活発に行われました。

#### ■ドイツとフランスの大学の日本学科

ゼミを一緒に行ったのは、ハイデルベルグ大学、ストラスブール大学の日本学科の学生たち（主に、修士課程生）です。研修中、ゼミでの発表や議論、またゼミ外での交流も、大部分は日本語で行われました（ハイデルベルグ大学での法政側発表だけ、英語で行いました）。確かに彼らは日本語を専門に学ぶ大学院生たちですが、それでも日本語歴は3-4年程度です。それを考えるとき、毎年のことですが、彼らの日本語の運用能力の高さには驚かざるをえません。旧聞ですが、あるハイデルベルグ大学生の話によれば、学部1年次の日本語の授業時間は週16時間だったとのこと。日本学科入学者を100人とすれば、そのうちで2年生に上がったのは30人ほどだったということ。それを聞いて、彼らの日本語力にもある程度、納得がきました。

#### 研修の詳しいスケジュール表

法政大学「国際哲学特講」

2017年度アルザス研修プログラム

2018年2月4日（日）～11日（日）6泊8日（一泊機中）

法政大学参加者：

- ・哲学科学生 23名（ミュルーズ大学大学院に留学中の哲学科既卒学生1名が途中で一部参加）
- ・引率 安孫子信

#### ■1日目

2月4日（日）

18h05 羽田空港よりロンドン経由でドイツ・フランクフルト空港到着。

16h00 チャーターバスにてフランクフルト空港到着よりドイツ・ハイデルベルグへ移動

夜ハイデルベルグで自由夕食  
ハイデルベルグ・ホテル泊

## ■2日目

2月5日(月)

ホテルにて朝食後、ハイデルベルグ大学に向けて出発(徒歩)

9h30 ハイデルベルク大学にて合同ゼミ

ハイデルベルク大学日本学科ハンス＝マルチン・クレマ先生

合同ゼミ「日独文化比較—動物と社会」

ハイデルベルク大学日本学科生＋法政大学哲学科生

12h30 大学学食にて昼食

13h30 旧市街見学(学生牢・ハイデルベルグ城・古橋)

17h00 チャーターバスにてアルザスへ向け出発

19h00 中途のレストランにて夕食

22h00CEEJA 着

CEEJA 泊

## ■3日目

2月6日(火) エクスカーションの日

7h30CEEJA にて朝食

9h00 オーケニスブール城へ向け出発

9h45 オーケニスブール城見学

11h30 オーケニスブール城からセレスタへ向け出発

12h00 セレスタのレストランにて昼食

その後セレスタ市内見学(ロマネスク・ゴシック教会建築)

14h30 エギスハイムへ向け出発

15h15 エギスハイム見学

16h45 リクヴィルへ向け出発、着後リクヴィル見学

18h30 リクヴィルのレストランにて夕食

21h00 CEEJA 着

## ■4日目

2月7日(水)

7h30CEEJA にて朝食

8h30 ストラスブールに向けて出発

10h00 ストラスブール大学博士課程校舎講堂にて合同ゼミ・午前の部

ストラスブール大学日本学科黒田昭信先生

合同ゼミ「レヴィ＝ストロース『月の裏側』をめぐって」

ストラスブール大学日本学科生＋法政大学哲学科生

12h30 大学近隣のレストランにて昼食

14h00 ストラスブール大学博士課程校舎講堂にて合同ゼミ・午後の部

17h45 ゼミ終了 ミッテルヴィルに向け出発(ストラスブール大学生同行)

19h30 ミッテルヴィルのホテルにて夕食

夜ストラスブール大学の学生と懇親会(ホテル・ホール)

ミッテルヴィルのホテル泊（ストラスブール大学生宿泊）

■5日目

2月8日（木）

7h00CEEJAにて朝食

8h30 ストラスブールに向け出発

9h30 ストラスブール旧市街・ユネスコ世界遺産カテドラル見学

12h00 自由昼食・自由見学

15h00 ストラスブール大学へ移動

15h30 特別講義／大学宮殿

ストラスブール大学日本学科アントナン・ベシュレル先生

「大江健三郎『セブンティーン』二部作における「アルカイックなノスタルジー」をめぐって」

18h00CEEJAに向け出発

19h00 カイザスベルクのレストランにて夕食

CEEJA泊

■6日目

2月9日（金）

7h00CEEJAにて朝食

9h30CEEJA オリガスホールにて若手研究者による発表

ストラスブール大学日本学科講師デルフィーネ・ムラール先生発表

「江戸時代の奈良絵本・絵巻をめぐって」

12h00 コルマールへ向け出発

12h30 旧市街にて自由昼食

15h00 ウンターリンデン美術館見学、その後市内自由見学

18h00 CEEJAに向け出発

18h30CEEJA 帰着

19h00CEEJAにてディナーパックの夕食

CEEJA泊

■7日目

2月10日（土）

4h00 バーゼル空港に向け出発

7h00 バーゼル空港発、ロンドン経由、羽田空港着で帰国（翌日）

全移動手段チャーターバス

参加学生の言葉から

■（A）—アルザス研修に参加して—

まず初めに少し後悔しているのは直前になってパソコンが壊れる、風邪をひくなどあたふたしてしまい、あまりきっちりと準備ができなかったことです。しかし、正直参加すら危ぶまれていたので、なんとか参加できてよかったです。（今度は元気な状態で飛行機に乗りたいです…。）まず、大きく印象に残っているのは西洋建築の美しさです。ストラスブールのカテドラル、村の古い教会…大きなものも小さなものもとても美しく、何時間でも留まっていられそうな清浄な空気感。日本の寺や神社とはかなり違ったそのピンとした、張り詰めたような、凜としたような雰囲気がとても心地よくて好き

でした。それ以外も木組みの古い家々や街並みが実用的ながらも美術的な美しさを持っていて、こういう街に住んだら楽しいだろうな、と思わせてくれました。なんとも筆舌尽くしがたい感動や、心震わせるものがある、この地は私を引き付けるには十分な力を持っています。西洋美術の粋。風景、街並み。それがまず、私の印象に残っているものです。

2 つ目は現地の人々です。ストラスブール、ハイデルベルグの学生達は本当に日本語が上手く、中には語学が堪能な学生もいて、何か国語も喋る姿を見ていると、私にとあるジョークを思い出させるのです——いつも猫に追い回されているネズミがいました。そのネズミはいつものように意地の悪い猫に追い回されていましたが、角から聞こえる、「ワンワン」という鳴き声を聞いて、仲良しの友人である犬が、助けに来てくれたと思い、その方向へ向かうとそこにいたのは件の猫で、ネズミは捕まってしまう。ネズミは息も絶え絶えに「一体どうして君がいるのだい？あの鳴き声は僕の友達の犬じゃなかったのかい？」と聞くと猫はにんまりとこう言ったのです。「何、今のご時世2か国語くらいは喋れないと生きていけないのさ」と。正しくその通り。2か国語くらい喋れないとやっていけないなあ、と痛感させられました。しかし、語学というのはあくまでツールでもあります。語学にプラスアルファ、何か1つ持つべきであり、私の場合、それが哲学と言えていると思っています。いずれにせよ、私達は猫語だけでなく、犬語も理解する必要がある、と思うのです。全くの異言語を操る彼らは本当に一生懸命勉強していて、しっかり日本語を学んでいるのを見ていると、身がしまるような思いがしました。日本にずっといてのんびりとしていたのなら気づかないものでしたでしょう。一層留学への思いを新たにすることができました。

私達日本人にとって依然外国というものは遠い存在であるように見受けられます。外国に興味を持って、国際的に活躍するというだけで、1つのジャンルとして成立するくらいには。それはやはり日本の内向性、閉鎖的感覚が強く関わっているものだと思います。諸外国ではそれこそ、他国と共同で仕事をする、なんてことは当たり前のように行われてきたし、映画、演劇や、ビジネスなど様々な業種での交流も盛んです。もう閉鎖的にやってはいけない時代ですから、もっと外へ世界を広げる必要があると私は思います。国際交流学科のような場所だけではなく、様々な分野で。やはり、海外の人、様々な人と関わるのは勇気がいりますし、大変なことですし、語学の壁もあります。けれども、その分新鮮な発見や、驚き、刺激も大きく、個人的には日本人のどこか同質的空気と違って、多様なステレオタイプにとらわれない彼らの自由さや、寛容さというものが、とても好きです。同質性というものは時に非常に甘美な心地よさ、居心地の良さをもたせてくれるものですが、それは同時に組織的な脆さ、日和見体質を作り出すものです。多様性、差異というものが笑えるくらい少なく、固定概念に囚われがちな私達の頭を固くし続ける。それを打破するためにもやはり外へ出なくてはならないと、私は思うのです。異国の地、異国の人々、全く違うものはいつも、私を楽しませて、驚かせてくれます。そのたびに、私は気ままに旅に出たくなるのです。ここにとどまっていられない、私の中の何かを揺り動かそうとしているのです。それに応えるには、まだ勇気が足りませんが、その心の赴くまま、海の外を自由気ままに歩きたくなるのです。

……………どうしてかはわからないけれども、もっと遠くへ！自分の世界が、もっと広がっていくことを願って歩きたいと思っています。

## ■ (B)まとめのレポート—アルザス研修に参加して—

### 【感想】

今回のアルザス研修を通して印象深かったことを挙げるとすると、まず真っ先に思い浮かぶのは「ヨーロッパ世界が我々の世界と、文化、街並み、および価値観、さらには人生観までもが遠くかけ離れていた」ことである。私は高校在学中にアメリカ、カナダ、オーストラリアで学ぶ機会が多少与えられていたため、その地で日本では味わうことのできない刺激を目いっぱい受け、感化され、多少は「世界」なるものを知っていた気がしていた。しかし今回訪れたアルザスの経験を通して、私の今まで経

験した世界は世界全体ではなく、世界経済の中心であるアメリカ圏であるにせよ、それでも世界の一部に過ぎないことを知ることができた。(オーストラリアはイギリスと密接な歴史を持つが、オーストラリアの地でいわゆる「ヨーロッパ」を感じることはできなかった。)これは当たり前にも思われるかもしれないが、私にとっては重要で、まるで不意を突かれたような、発見なのである。

それと同時に、いかに日本がアメリカナイズされているのかが身に染みてわかった。第二次世界大戦以後の日本史を見れば、日本は実質的にアメリカに支配され、アメリカによって国を改革されたことは自明であるが、そういった歴史のせいなのか、現代日本人の思想の重要部には、「アメリカ的な」価値観が潜んでいるのだと感じ、そして驚愕した。高校時代のアメリカ圏での経験(あるいはアメリカが反映された日本での日常生活)を通して、知らず知らずのうちに、世界思想=アメリカである、と勘違いをしていたこと、さらに、日本思想の重要部はアメリカ的なものを含んでいるために私の中で起こった、世界思想=アメリカと私自身の日本思想の一致、により、私はいわば日本思想および私自身の思想にある種の「正義」を抱いていた、ともいえるのかもしれない。

しかしその「正義」は、普遍性を持っていないのかもしれない。実は、正しくない、のかもしれない。数日間にわたり目の前に広がった中世ヨーロッパの教会などの建築物、かわいらしくも重みを感じる家々、ゼミを通して語り合ったドイツ人フランス人たちの思想を通して、そう感じることもできた。

これから哲学を勉強していく上で、また生きていく上で、もう一度自身の思想を揉み解してくれた、そんな旅であったように思える。

### 【考察】

人間は誰しもが、自分の生き方について悩み、もがく。特に、20歳を迎え、いよいよ本格的に自立して生きてゆかねばならない私たちにとって、それはまさにいま直面している大問題であろう。(連日、活動が終わった夜、宿内の共有スペースで酒を交わしながら、そういった我々自身の人生観や未来について仲間同士で熱く語り合っていたこともまた、良い思い出である。)そしてその人間の人生、あるいは価値観や人格といったものは、本人が所属している社会によってその方向性が定められてしまう、知らず知らずに制限されてしまう、若いゆえに脆く、それでいてエネルギッシュなものであるといえるのではないだろうか。(ストラズブル大合同ゼミにて私が発表した日仏労働観比較でも示した通り、中でも日本人は協調圧力を優先させ、社会の影響はより甚大なものとなるといえよう。)

私は、大学2年のこの時期に、国際哲学特講、そしてアルザス研修に参加できたことに大きな意味を感じている。ヨーロッパの学生たちの学ぶ姿、その生き方、それを受け入れる社会…それらを見ると、日本社会に含まれる我々はその社会によって、あるいは他者との関係性によって、いわば「つまらない大人」への一步を進もうとしているような気がしてならない。よく、フランスは自由の国、などと言われるが、そういった学生たちの姿からはもちろん、街の雰囲気、大人たちの労働に関する価値観からも、まさに日本にはない「自由」のような輝かしいものが見て取れたからである。

アルザス研修を経て、私はもう一度自分の生きる意味や生き方を客観的に捉え、再構築しようと強く思う。ちょうど、長い春休みがやってくる。3年生の私は、4年生の私は、社会に出た私は、どう生きてゆくのだろう。学生たちや街並みを思い起こしながら、しっかりと考えよう、と思わせてくれた、それが私にとってのアルザス研修となった。

安孫子教授をはじめ、CEEJAの徳江さん、樋口さん、各教授たち等、このような貴重な経験をさせていただいた方々には感謝の気持ちで胸がいっぱいです。

## ■ (C)国際哲学特講最終レポート

### ①発見、印象

出発前に抱いていたような、白人達が抱いているであろう、アジア人達に対する軽蔑などは全く感

じませんでした。それどころか店員さんたちの笑顔と挨拶は日本のそれよりも暖かみのあるものでした。当然であるはずの挨拶が廃れてしまった日本に住んでいる自分にとって、皆が当然のように《ボンジュール!》と挨拶をしている様子には驚かされました。街を歩いているだけで高揚感を感じ、各名所の見学は本当に心洗われる様な清きものでした。

また大本命の学生達との討論において、彼らの思慮深さを前に、日本人の意見の根拠の弱さ、またはそもそも意見を持っていない人の多さを痛感しました。自分達の発表は大江健三郎についてでしたが、ベシュレル先生の講義を聴き、それが完全な正解と盲信するつもりはありませんが、それにしても自分達の読解には欠陥があったと思わざるを得ません。また、まだ御若く見えたベシュレル先生の日本語能力の高さに加えて専門性の高さには、自分の不勉強を嘆くしかありません。

また、われわれのアシスタントもしてくれた修士1年のアルノーにはとても感銘を受けました。観光名所の説明をする際、取り出した紙には沢山のメモがあり、緊張で震えながら話す彼の姿には多くのものを感じました。

最後に私達の研修を円滑に完成させた大きな要因である CEEJA の徳江さんについて。徳江さんの存在が無かったらと思うと恐ろしいほどに全ての用意が万全でした。これらに関する感謝とは別の感情として、徳江さんの立場のような職業に強い興味を抱く自分を発見できたことも新たな発見です。

## ②自分に生じた変化、反省

①と重複する点も多々ありますが、今回の研修を通して自分に生じた変化の中で最たるものは、もう一度やる気を持って生きようと思えたことです。

自分は昨年復学を許された身です。退学をした後、1年間のオーストラリアにおけるワーキングホリデーを終え、その後長年の夢であった洋服業界に関する仕事を多数経験しました。様々な理由により、洋服業界を辞めた際、「海外に行ってみたい」、「洋服の仕事をしたい」という自分にとって最も大きな夢が叶ってしまい、やりたいことが無くなったことを感じていました。それ故に、少しの心残りであった大学の卒業を為すために復学し、流れに任せて普通に就職し、無難に生きていくことを受け入れていました。

しかし、この国哲が与えてくれた機会を通してヨーロッパで刺激を受け、自分のやりたいことをやろうと、かつて法政の看板を下ろしてまで海外に行き、洋服の仕事を探ることができるほどであった自分のやる気の炎が、また一度自分の中に灯った様な感覚を持ちました。

きっと、この文字だけでは僕がどれほど奮い立つことが出来ているか伝わらないと思うので、今後の自分の歩みをどうか見守って下さい。自分の中にもう一度エネルギーを注いでくれたこの授業とヨーロッパに、本当に感謝しています。

ありがとうございました。

## ■ (D)アルザス研修を終えてのレポート

終始、自由と幸福を感じる1週間でした。アジア以外に降り立つのは今回初めてで、英国本場(ネイティブ)の英語を飛行機で聴けて気分が高揚しました。すでに行きの飛行機から、この旅が素晴らしいものになるだろうという予感がしました。そうしているうちに12時間かけてロンドンに到着し、通る人、標識などから本当に外国に来ているのだと実感が湧いて来ました。さらに飛行機でドイツまで乗り継ぎ、トータル16時間かけて宿泊地ハイデルベルクまで移動し終え、待望の夕食を食べに近くのレストランまでみんなで歩きました。ここでの夕食代のみ自腹であることを聞いたので、ここは奮発して一番美味しそうなものを頼もうと26ポンドほどのステーキを頼みました。ドイツで食べるお肉の味は、いつも食べるものより格別に美味しかったです。

2日目の朝はホテルのバイキングでした。ヨーグルトとチーズとハムとソーセージを選んだのです

が日本での朝食ではありえない、カマンベールチーズの食べ放題は気分が高まりました。さて、そのあとはいよいよハイデンベルク大学での発表でした。想像よりも少し広い教室で少し緊張しました。一応発表自体は滞りなく終わったように思いましたが、安孫子教授の事前のアドバイス（添削）と原稿がなければ緊張で思考が止まって何も言えなかったと思います。思考の整理をしてアウトプットをするトレーニングをしなければいけないと痛感しました。その後のディスカッションの後の各班代表者の発表のスマートさを聴いてもそう思いました。その日は昼食を学食で食べたあと、ハイデンベルクの旧市街を見学しました。ハイデンベルク城は標高の高い場所にあり、建物が細かい構造になっていて眺めも良かったので特に印象に残りました。

3日目は、ドイツやスイスまで見晴らせる、標高が高く気温が低い場所にあるオーケニスブル城の見学に行きました。こちらの建物はハイデンベルク城よりも荘厳で迫力のある印象を受けました。また、夜のリグウィル村のレストランでは、赤と白のテーブルクロスにフランスの田舎料理が運ばれてきて、そのアンサンブルが示す世界観をととても可愛いと感じました。

いよいよ4日目はストラスブル大学との合同ゼミです。私はハイデンベルクで発表を終わらせたので正直内心ホッとしました。なぜならマイクを使うくらいの大教室で、生徒の人数もドイツより多く、黒田先生という鋭い意見ではっきり切り込む先生がいたからです。それにも関わらず発表者の皆さんは堂々といい発表をしていて、普段とは別人に見えました。やはりここでも、日頃から自分の思考を整理し言語化すること、興味を持ったことをとことん勉強しようと思いました。また、現地の学生と話して気づいたことは、当たり前にも3ヶ国語が堪能だということです。しかも外国語が目的ではなく、何かを勉強するための手段になっているのです。よく日本の学生には、英語が話せるようになりたいと勉強する人が多いですが（私もそのうちの一人です）、彼ら（彼女ら）は例えば日本の文学を読むためというように、より多くの人とコミュニケーションをとる可能性を得る手段として外国語を習得しているのです。軽く石で殴られたような衝撃を受けました。また、中国人留学生のユメさんは15歳からフランスにきていると言っていましたが、「なぜフランスだったのですか？」と尋ねると、「好奇心！」と一言返って来ました。この行動力、潔さも衝撃でした。自分も小さいことでもいいからやりたいと思ったことは実行しようと決心しました。また、法政大学哲学科出身で、現在ヨーロッパ政府から援助を受け大学院で学んでいる樋口さんの言葉がさらに上をいく一番の衝撃でした。「こっちの生活は、楽しいですか？」と尋ねると、「はい！人種も年齢も関係なくみんな学んで学ぶというのは非常に生きている実感がすることです」という素晴らしい言葉が返って来ました。「学んで、生きる実感がする」という言葉の表現と、樋口さんの生き生きとした言い方がドスンと伝わって来て思わず涙目になっている自分がいました。

研修中、衝撃が走った言葉や、自分の中に生まれた決意や、素晴らしい人、建物、食べ物に出会えて大学生活で最も濃い幸福で自由な1週間となりました。

[※以上は帰路、あるいは帰国直後に執筆された、研修に参加した学生たちの感想レポートから、短めのもの4本を選び転載したものです。]

## 写真でたどるアルザス研修

[※以下の写真は大部分、研修に参加した学生たちが撮影したものです]

### ■ハイデルベルグ大学での合同ゼミ



■ハイデルベルク大学でのグループ討論、



■ハイデルベルク大学でのグループ討論、その二



■ハイデルベルク大学で、合同ゼミを終えて



■ ストラスブール大学での合同ゼミ、発表



■ ストラスブール大学での合同ゼミ、グループ討論、その一



■ ストラスブール大学での合同ゼミ、グループ討論、その二



■ミッテルヴィルでの、ストラスブール大学生とのディナー



■ミッテルヴィルでのストラスブール大学生との懇親会



■ 記念写真—ハイデルベルク、ストラスブール



■ 記念写真—コルマール、CEEJA



■ お世話になった先生方、その一：ハンス・クレーマ先生（ハイデルベルク大学）、



■お世話になった先生方、その二：黒田昭信先生（ストラスブール大学）



■お世話になった先生方、その三：アントナン・ベシュレル先生（ストラスブール大学）



■お世話になった先生方、その四：エーリッヒ・パウエル先生（マールブルグ大学/CEEJA）と  
デルフィーヌ・ムラール先生（ストラスブール大学）

